

# 義忠臣蔵

三〇

## 本巻下屋敷

〔解説〕大外題は「増補忠臣蔵」ともいふ。著作者も年代も明かでないが、恐らくは明治に入つてからのものであらうと言はれる。忠臣蔵の九段目の陰に置いた氣の利いた趣向の底を割つたやうな行き方で、成程増補には相違ないがまづい行き方である。でこの跡九段目を出すと興味は半減されて了ふから、歌舞伎でも操りでもこれだけを離して出すか、又は八段目の道行とこの段とを續けて出す行き方なのは當然な事であらう。

増人知れぬ。思ひこそのみ侘びしけれ。も淺草の。片原町にしつらひし。加古介。ハズミ忍びと。見えて案内につれ。我が歎きをば我が身ぞ知る。三世の縁 川本蔵が下屋敷へ。主人桃之井若狭之。直ぐに乗物裏門より。座敷へ昇込むそ

の饗應或ひは美盡し善づくし。オロシあらん。フシ限りの饗應なり。御用際、同成程心得ました。スリヤお姫様の乗にや近習井浪番左衛門。家來引連れあたりを見廻し。同コリヤ「家來ども。主人桃之井若狭之介様の妹姫三千歳殿。先達つて此本蔵が屋敷へ差越され。病氣保養とは表向き。誠は許嫁の縫之助殿と。遠ざけん爲お預けなされし所。密かに」と地蔵し合はして下部どら。古へ須磨へ流罪の行平卿を。こが今日お迎ひの役目この番左衛門に仰付けられ。また殿様是へ御成りなされたは。詔ひ武士の本蔵を。御成敗なされうとの事だ。我かねて三千歳姫に心を懸くる所。本蔵めが彼是妨げなす何に付けても邪魔な奴め。今日御成敗相濟んだ上。三千歳姫は身が御供申し。屋敷へ連歸れとある御上意。何と時節は待たねばならぬものだ。大願成就するは今日今夜。しかし豫て手剛き本蔵ならば。必ず油斷いたすな。もし手につしやり。はつと思へどそらさぬ體。誰が糺して水屋の陰、ハメズシ忍んで様子立聞くと。地蔵斯くとしら齒も咲く花の。桃之井若狭之介が妹三千歳姫。慕ひこがる、縫之助に。別れ程經し物思ひ。タ、キ目には涙の玉簾。明けて一間を立出でて。釜の煮音耳にとめ。アノもずやの煮音は。松風に似しとやら。古へ須磨へ流罪の行平卿を。こが憂身とや。ホンニ縫之助様とこの三千歳が。カ、リ身にひしんと片時も。思ひ逢ふ夜の新枕交す互の言の葉も。朝月の儘きぬぐに。お別れ申した其後は。爰に月雪花川戸。霞が關と引別れ。いつか屋敷へ歸る雁。文の便りも音信も。泣くは鷗が百千鳥。翅あるなら殿様の。お傍へ行きたいとい。人目なければ聲を上げ。フシ卿ち給ふぞ痛はしき。地時分はよしと番左衛門。

廻ひをそつと傍に寄り。詞姫君様。三何として。ならぬ戀路にこれがうさうだ。悪いお遊びが始つて。何が其千歳様。といふにこなたは涙を隠し。より。男に持つて何不足のない此番左衛門。又お前様がお力になさるゝ本藏。扱へとか申す鬼の役。拙者に仰付けら。ヤアそなたは番左衛門。いつの間に。衛門。めは。今日殿様御直の御成敗。何と御。おぢやつた。アイヤ只今参つた。イヤ合點が参りましたか。コレサ。三千。ナニ姫君様。今日は本藏が身の落著。又お前様には。今宵屋敷へ連歸れと。即。歳様。何も其様にすげなう遊ばすもの。ち此番左衛門。御迎ひの役目でござりではござらぬ。兼好法師は何と申した。ます。ム、何と言やる。兄上様が自らサ、御存じなくば此番左衛門。ツ。に。今宵屋敷へ歸れとかや。イヤモ歸イちよこゝと御傳授いたそ。取。寄つて。御家老殿。本藏殿。某を人。るとも。肝玉がでんぐり返る俄か付く手先を振放し。主に對して慮外。非人だと蔑せらるゝ。こなたの非から。の御婚禮。なんとお嬉しうござりませの戯れ。無禮であらうぞ。穢らはしい。改めよ。いづぞや鎌倉響應の砌。金銀。うがな。ヤア。そんならアノ。縫下りや。オツト下つて裾から手を以て師直にこび詣ひ。御主人に詣ひ。之助様と祝言かや。ア、イヤ。拙者とを。入れかはぬつと本藏が。出るとも。武士の惡名附けたは。不忠とや言はん。祝言ささうとある殿の御上意。エ是は知らぬ戀慕の闇。振りの袂をひき白。の人非人とや言はん。サ、サレバサ。したり。お逃げなさるな。マア。くる。廻り目に餘り。二人が中を加。その越度故に先達つてより御日通り叶。お下にござれ。姫君様。さりとては古川と。知らず抱付く番左衛門。井。はす。此下屋敷へ蟄居の本藏。さりな。難面と申すものハ、ハ、ハ。お前様が浪氏。コリヤ何となさるゝ。ヤア加古。横戀慕は致さぬ。ヤ何と。まだ。戀ひこがれてござる縫之助殿は。鹽冶川氏か。エ、マ悪い所へ。何が何と。ア申さうか。此釜の湯にムハ、ハ、ハ。言。判官の弟なれば上への恐れ。御縁組はアイヤ悪い。ハ、ハ、ハ。オ、はぬぞや。一命は主人へ捧ぐるが臣の

習ひ。御直の成敗少しも厭はぬ。イヤ。手先しまりて喰入る縄。目には泣は討ちもらしたり。然る所諸大名の取モずんと恐れ申さぬ。地と行國が詞にかねど心には是が忠義の仕納めかと。沙汰にも。若狭之介は詔ひ武士。卑怯井浪番左衛門。フシしよがり入つてぞ閉思へば足も。たどくと。主人の賢慮者。と殿中一杯の取沙汰と聞く。その上口す。地折から下部が罷り出で。御測りかね奥庭へこそ。三退へ行水の。地。上へ流るゝ例なく。オトリ憂き事。積る行國が。文藝力、消ゆる間を待つ庭の金打致いたでないか。そちや某を誑つ家老本藏様を御成敗とあつて。急ぎ本面。我を仕置の芭蕉葉の。廣きも今は番左衛門に申付くるとの御説でござる。地と聞くよりはつと驚く加古川。恨めしく。人はそれとも白洲なる。フシ井浪は得手に本藏が。フシ大小もぎ取り早縄打ち。調サア本藏モウ叶はぬ。御成敗だ。御成敗だ。太刀取りは此番左衛門。ハレヤレ氣の毒千萬ハ、ハ、あらす。その方家柄と申し。勤功に愛ハ。何にも周章てる事はないぞ。どうで。先祖より家老職を勤めさせ。知行ム、スリヤ松の木の偏を切取りしは。だ震ひが出たか。オ、尤もだ。わ。五百石を當て行ふ。然るに某。さいつ國家の爲。この若狭之介へ諫言の諛とりや最前何といった。一命は主人へ捧てんと存ぜし所。彼奴低頭平身。イヤム、然らば受けし恥辱は如何に。ハ、けるが臣の習ひといったぞよ。イヤサモ存外の詫びごと。コハ心得ずと思ひア。コハ存じ寄らざる御仰せ。君辱かぬかしたぞよ。サとても叶はぬ事と観念して。早く立て。きり。立ちしが。汝師直が屋敷へ拔出で。不相應しめらるゝ時は臣死すと申す。だまれ居らう。地とどうと蹴飛ばし引つばれる金銀を以つてこび諂ひし故。師直本藏。左言ふ汝が何故に。なぜ切腹は



は扱て置き。判官が位牌かひはいへサ言譯立つて外へ。小柴垣こしばがき。フシ庭に。淵なすば助が宅へ土産にせよ。地と手づから給まい。この若狭之介が爲には。身代り同然の判官。我が命ばかりか先祖へ對し。忠臣義心とは汝が事。詔うても苦しいないぞ。ナニ詔ひ武士は世間に幾らもあるわい。判官が今の有様。後車こうしやの戒めと。ふつり短慮とゞまつたもそちが蔭婚しいぞよ。過分なぞよ。か程の家來に暇遣はす。若狭之介が心の内を推量せよ。さりながら義を見てせざるは勇みなし。此上の頼みといふは三世の縁。未來で。未來で忠義を盡してくれ。地と跡言ひさして顔背け。歎かせ給ふ御有様。有離しとも嬉しとも。申し上ぐべき詞もなく。かゝる智仁の名將の御馬先でも死す事か。僅かの義理と誤りに。命を捨つる不忠不義。何と先非せんびを悔み泣き。御顔見上げ奉れば。殿も見下し御落涙。袖や袴に雨車軸流しやうりゅう宿の一禮。心を籠めし此一書。由良之ハア。唄送る素足の氷のくさび。朝明

次つぎの衆。臺子の釜を持ち來られよ。地はつといらへて持運べば。本藏立つて釜の湯を柄杓に移し鉢植に。注ぎかれば竹蘭の枯れて萎まる。フシ釜中ハ有難し〜と。戴き直に懷申し。土の毒湯。調先刻番左衛門臺子にかゝり。に喰付き三拜九拜。フシ有難涙にくれ皆殺しにせんと仕込みし毒藥。立聞きにける。地若狭之介四方を打眺め。調したる本藏。幸ひ天目奉らざるは右の誠や九枝燈火盡きて。只曉あけを期すとか仕合せ。ハレ御運強き我が君様。地とや。名残は盡きず。目出たう門出の盃申し上ぐれば若狭之介。フシ猶も忠義をせん。出立の用意致せ。ハ、君には益感じける。地暫くあつて小姓ども。何益御機嫌よう。オ、そちも無事で。イヤ首尾よく仕果せ。日出たう〜。未か様子は白木の臺。一重練に並べしは。ヤ首尾よく仕果せ。日出たう〜。未三衣袋に袈裟尺八。フシ錢別とこそ知來で逢はう。ハ、ア。二上唄馴れし金られけり。詞ナニ本藏。その袈裟尺八の。夢を貫く寒山寺。調ム、思ひも寄らねアノ唱歌は。妹三千歳が餘所ながれ。焼野の雉子夜の鶴。巢籠の一曲。又こら暇乞ひと見ゆる。ム幸ひ本藏。そちの一品は。妹三千歳を預け置いたる止も一曲致せ。苦しうない許す。ハ、ハ

の嵐に暮れの雪と。浮かれし事も。最早迎ひの駕待つばかり。星の名残りの柴小船。同本蔵。近うく。ハ、面を上げい。ハ、我二十五年の春秋を。朝には教訓の霧を拂ひ。夕には講説の星を蔽き。晝夜旦暮のいつくしみ。満足に思ふぞよ。是がこの世の見納めなるぞ。ハ、ハ、ハ、出立いたせ。ハ、ア。盡きぬ名残と本蔵が。涙を隠す編笠の。深き恵みに浅き縁。コレなう暫しと三千歳姫。駈出で給へば若狭之介。袖の枝折戸袂の關。押し固まれて加古川も。笠の内より御顔を。見奉れば姫君も。いと涙に糸竹の。未來は一つ一試斷金。やがて黄鐘懸鏡は。君に仁あり臣に恩。あるは音律音曲の。榮え榮ゆる世のためし。筆に。傳へて加古川の武名を。永く残しける

(義太夫節終り)